

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	河西 瑛里子
論文題目	女神運動から紡ぎだされるつながり——イギリス南西部グラストンベリーにおけるオルタナティヴ・スピリチュアリティの文化人類学的研究		
(論文内容の要旨)			
河西瑛里子氏の博士学位申請論文（以下本論文）は序論（第1章）、本論（第2章～第7章）、結論（第8章）から成る。本論の章題は以下の通りである。第2章「オルタナティヴな町」、第3章「アヴァロンの女神たち」、第4章「排他的な共同性」、第5章「移住という選択肢」、第6章「つながりへの希求と忌避」、第7章「フィールドワーカーを迎えて」。 本論文の第一の目的は、オルタナティヴ・スピリチュアリティ（以下スピリチュアリティ）という現代のイギリス社会にみられる宗教現象の意義を、南西部のグラストンベリーという町で始まった女神運動を事例として考察することである。スピリチュアリティは、現代の欧米社会で伝統的または主流とされてきた宗教と相容れないものとして位置づけられてきた。具体的には、教会を基盤としたキリスト教、近代化が進んだ欧米の現代社会（主流社会）へのオルタナティヴな宗教実践が想定されている。しかし、これまでの研究は、当事者の著作物や主催する催し物の分析が中心となっていて、理想化された実践や主張をそのまま受け入れてしまう傾向があった。これを取りこえるために日常的な実践に注目し、女神運動が生み出すコミュニティの性格について考察する必要がある。 そこで本研究では、スピリチュアリティについて、体制への抵抗や対立、あるいは現実に対するユートピアという形で捉えるのを避けるため、第2章と第3章においてイギリス社会や地域社会という文脈で女神運動の実践の生成と発展を位置づける。続く第4章から第6章では、グラストンベリーの女神運動の創始者による著作物や儀式だけではなく、生活世界における当事者同士の人間関係に注目し、スピリチュアリティの実態を描き出すことを目指している。 第2章では、グラストンベリーでスピリチュアリティに関するさまざまな事象が展開していった要因として、キリスト教がイギリスに普及し定着する以前の伝統とのつながりを示唆する伝説が存在したことと、社会保障制度が充実していて移住者が経済的基盤を確保しやすかったことが挙げられている。かくして、町の製造業の衰退を補う形で、スピリチュアリティ産業が発展していくことになる。 第3章では、多彩なスピリチュアリティがグラストンベリーで盛んになってきたという事実と、政治的側面より宗教的側面が強調されるようになってきた現在の女神運動の潮流を背景に、グラストンベリー女神運動が創造されたということが指摘されている。そして、女神運動がイギリス特有のスピリチュアリティであることを指摘している。			

そして、女神運動のコミュニティに参加する人々の相互関係のあり方を三つに分けて考察していく。すなわち、第4章では、季節の祝祭の事例から、儀式がグラストンベリー女神運動に積極的に関わる人々の間にのみ結束力を生み出す場を提供しており、儀式の意味に通じていなかったり、使用されている道具についての知識に乏しかったりする参加者は排除されてしまうという事態について、具体的に論じている。儀式は、新参加者を積極的に取り込むという役割を果たしてはいないのである。

第5章では、女神運動に積極的に関与する人々がグラストンベリーへの移住に至るまでのライフストーリーが分析対象である。彼らが、親しい人を失った喪失感や孤独感から、閉鎖的で濃密な場を共有することで育まれるコミュニティを核とする女神運動に惹かれ、新しいつながりを求めていく様子を考察している。

最後に、第6章では、苦しみの語りを共有し深いつながりを求める一方で、このような深いつながりを避け、ある程度の距離を保ちながら、ただその場で楽しく過ごすことを望んでいるような人々の事例を論じている。

さて、序論では、本論文の第二の目的は、調査の場で生まれている調査者と被調査者の関係の考察であるとされている。文化人類学では、調査者が被調査者の文化を一方的に語るという点で、両者の関係は非対称的であるとされてきたが、被調査者が欧米人である場合、必ずしもこうした不均衡な力関係が認められるわけではないと指摘されている。そこで、第7章では、それまでに示してきた事例を再考し、調査をしている場では調査者と被調査者の関係はことさらに明示されず、調査者も第6章で示したような関係をつくりだす一員だったことを示す。

以上の資料の分析を通じて、本論文は、結論（第8章）で、今までの議論をまとめたうえで、第一の目的であるコミュニティの特徴については、深いつながりを求めつつ避けるというコミュニティのあり方を、融合と非同一性の間を行き来する流動的なものとして提示し、このようなつながりのあり方こそが、女神運動、ひいてはスピリチュアリティに人々を惹きつける原動力となっている可能性を指摘する。

また、第二の目的については、女神運動が生み出す人間関係は、調査者にとってもラポールの形成がしやすいため批判的な視点を保持するのが時に困難になるという問題について指摘している。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、イギリス南西部に位置するグラストンベリーにおいて認められるさまざまな宗教実践の中で、女神を崇拝する運動（以下女神運動）に注目し、これをオルタナティヴ・スピリチュアリティととらえたうえで、その特徴について分析を試みている。本論文の評価すべき点は以下の3点にある。それらは、1) 対象の独自性、2) スピリチュアリティ研究への貢献、3) 民族誌記述における自己と他者の関係についての議論の独自性である。以下、簡単に説明していきたい。

1) 対象の独自性

19世紀に西欧で生まれた文化・社会人類学は、「未開人」を対象に取り扱う学問であったが、20世紀半ばになると、調査地は「未開」の地から中米、中国、インド、日本などを含む文明（文字社会）へと拡大していった。しかし、ヨーロッパが、文明であれ「未開」であれ非ヨーロッパをフィールドワークするという非対称性は変わることがなかった。いまでも状況はさほど変わらない。宗教研究における日本人による数少ない例外は、フランスのルルドやスペインのサンティアゴ・コンポステーラへの巡礼についての研究である。本論文は、日本人がイギリスの宗教実践を取り扱っているという点できわめて価値の高いものとして評価できる。

2) スピリチュアリティ研究への貢献

本論文を特徴づけているのは、一地方で行われている女神運動という宗教実践に対する行き届いた考察である。それは、従来の文化・社会人類学の学術的な地平をはるかにこえた多彩なアプローチに基づく。イギリスにおける宗教の変化、さまざまな非キリスト教的宗教実践の興隆、そうした変化を生み出してきた社会背景や手厚い社会保障といったイギリス社会の特徴などが説得力のある筆致で描かれている。また、本論文の調査地となった片田舎のグラストンベリーが、なぜ今日イギリスでオルタナティヴ・スピリチュアリティと呼ばれるさまざまな宗教実践の中心地になったのかを明らかにしている。さらに、主題である女神運動についても、その創始者であるキャシー・ジョーンズの思想を丁寧に紹介・考察している（第2章と第3章）。本論文の眼目はもちろん、申請者によるフィールドワークに基づく宗教実践のデータとその分析ではあるが、以上のような文献や口述による歴史的な記述と分析も高く評価されてよい。

フィールドワークによる観察データは、女神神殿での儀礼や信者たちの交わりの様子など多岐にわたる（とくに第4章）。ここで申請者は、信徒間の関係について重要な考察を試みている。さらに、注目したいのはインタビューによる信徒たちのライフストーリーである（第5章と第6章）。そこには、イギリス社会で生きる人々のライフ（生）とスピリチュアリティへの深い思いが生々しく語られていて興味が尽きない。階層的

にも宗教的にも異なる背景をもった人々がグラストンベリーに集い、女神運動に参加し、時にほかの信徒との軋轢のために運動から去っていく。そのような人々の生はときに感動的ですからある。

これらの包括的なアプローチを通じて、本論文は現代イギリス社会におけるスピリチュアリティを核とするコミュニティの性格に迫っている。従来の研究では、信仰の質や癒しの過程、あるいは主流となる宗教実践との関係に注目していたが、本論文では信徒間の関係に焦点を当てることで、文化・社会人類学的研究における今後のスピリチュアリティ研究の方向を示すことに成功している。

以上から、本研究は、ヨーロッパ（イギリス社会）についての良質な宗教人類学的研究として位置づけることができる。

3) 民族誌記述における自己と他者の関係における独自の議論

本論文は、対象と距離をとって「客観的」に記述しようとするこれまでの研究者たちの態度を批判的に検討し、むしろ調査者と研究対象となる人々のやりとりをも記述の対象にするという手法を採用している。これはなにも本論文が開拓したものではなく、1990年代以後の文化・社会人類学においては常套のスタイルである。しかし、こうした手法をイギリスでとることで、イギリス人（ヨーロッパ人）とアジアから来た研究者との複雑な関係を浮き上がらせ主題化することに成功しており、これまでの民族誌記述と一線を画している。

最後に1点だけ問題点を挙げておきたい。本論文の目的の一つは女神運動におけるコミュニティに認められる人々の共同性あるいはつながりについての分析である。それは、一言で言えばつかず離れずの距離を保つつきあいと考えることができるが、この発見を既存のコミュニティ研究に対する批判的見解として位置づけているとは言えない。こうした問題点があるにもかかわらず、本論文は独創性に満ちたすぐれた学術論文であるという点で審査員の意見が一致した。

以上を総合して本論文は博士（人間・環境学）の学位に値するものと判断される。また、平成25年5月31日に論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降